2026 年 7 月 26 日（日）第 563 回・現場学と主体性が拓く「世界のベニス」三島への道

> NPO 法人グラウンドワーク三島専務理事の渡辺豊博氏と評議員である門倉京子氏との対談です。
>
> 渡辺氏は、高校生・大学生ボランティアが基本的な道具の使い方すら知らないという現場での実態を語り、座学中心の教育が育めない「主体性」と「実践学」の重要性を訴える。
>
> 一方、神奈川から三島に移住した門倉氏は、農業・デザイン・地域活動の三本柱で地域に根ざした活動を展開しており、耕作放棄地の再生や国産米・小麦の生産、そして「AI ジャンボ」の活用を通じた市民協働による「世界のベニス」構想への参画意欲を語った。

現代若者における現場作業能力の欠如と主体性の重要性

三島梅花藻の里では、毎週木曜日に定例の草刈りボランティアが実施されており、現在は、毎週、約 8 名のこころ未来高等学院の高校生が参加するようになっている。

渡辺氏は、この現場で、若者たちの基本的な道具の扱いに深刻な問題があることを指摘する。参加した高校生のほぼ全員が、ノコギリの取っ手ではなく、刃に近い先端を持ち、さらに本来「引いて切る」べきノコギリを「押して」切ろうとしていた。当然切れずに困る生徒たちに、渡辺氏は「押してダメなら引いてみろ」という言葉で実践的な気づきを促した。

こうした問題は、高校生に限らない。以前参加したある有名建築大学の学生たちは、金槌で釘をまっすぐ打つことができず、自分の手を打ったり、斜めに打ち込まれたネジをどうやって抜くのかさえわからない状態だった。

さらに、現場に用意された木材の寸法を測り、必要な材料を確認してからメモを書くという、設計から、加工に至るまでの当たり前のプロセスを自分で組み立てる能力が著しく不足していた。

これらの学生はCADやAIといったシステム学習は習得しているものの、現場での応用力が欠如していると渡辺氏は嘆く。

渡辺氏が、特に強調するのは「主体性」の育成である。37度近い炎天下での作業において、渡辺氏は、高校生たちに対して、「先生の言うことを聞かなくていい、自分が危険だと思ったら帰っていい」と伝えた。

自分の体の状態を一番よく知っているのは、自分自身であり、高校3年生であれば、自己判断できる力を持つべきだという考えからだ。

グラウンドワーク三島の現場は、単なる労働ボランティアの場ではなく、社会常識や現場学・実践学を体で学ぶ場であるべきだと渡辺氏は語る。

また、口先だけが達者で、現場に来ない者が、地域社会を動かせるかのような風潮に警鐘を鳴らし、「現場に弱い社会」になってしまっているという懸念を率直に表明した。

新規移住者・門倉京子氏の紹介と活動への参画経緯

ゲストの門倉氏は、神奈川県平塚市出身で、今年で三島市への移住10年目を迎える。もともとはDTP（デスクトップパブリッシング）を中心とした広報・印刷物制作のデザイン業に従事していたが、デザイン業界が、若い世代へとバトンを渡していく流れの中で、自身の今後の生き方を見つめ直し、農業を志して、三島への移住を決意した。

移住先を選ぶにあたって、門倉氏は事前に複数の候補地を調べており、その中で源兵衛川に設置されたグラウンドワーク三島の看板を見て「いつかこの人たちと一緒に仕事がしたい」と感じたことが三島を選ぶ一因になった。

透明度の高い湧水と駅前の森・楽寿園の存在が、移住の決め手になったという。移住後は、ボランティアとして活動に参加し始め、5〜6年にわたって活動を継続している。今年度からは、グラウンドワーク三島の評議員に就任し、組織の中核を担う立場となった。

さらに門倉氏の娘も、グラウンドワーク三島でアルバイトとして働いており、親子ともども、グラウンドワーク三島に深く関与している。

農業を通じた地域資源の価値再発見と次世代への継承

移住者である門倉氏は、外部から見た時に、三島の「水」という資源がいかに価値あるものかを実感している。

富士山の麓に暮らす地元の人々にとっては、美しい水は当たり前の存在かもしれないが、神奈川県で育った自分の目には、透明度の高い水は「ものすごく貴重な宝」として映ると語る。

そして、グラウンドワーク三島が世界から評価されているのも、水を地域の価値・宝物として保護・保全していることが、その答えに他ならないと述べた。

門倉氏は、グラウンドワーク三島の活動の一環として、トラクターの運転や代かきを習得し、本格的な米作り、「ゆめみしま」の生産に取り組んでいる。

代かきとは、水を入れた田んぼの土を何度も平らにならす作業で、水を均等に行き渡らせることに加え、土の中に酸素を供給する役割も担う重要な工程だ。

タイヤ跡や地面の高低差を丁寧に均すことで、初めて安定した稲作が可能になると渡辺氏は解説する。

農地再生の成果も着実に出ている。平田地区で 10 年間耕作放棄されていた農地を田んぼとして再生したところ、カエルが鳴き始め、それを捕食する鳥が集まり、鳥の糞が、田んぼの肥料となる生態系の循環が自然に回り始めた。

単なる草むらだった土地が、水と米作りをきっかけに多様な生物を呼び込む生物多様性の基地ら変貌しつつある。

今後の農業事業としては、国産菜種油の製造と国産小麦の生産が視野に入っている。日本産の菜種油は非常に高値で取引される一方、国産小麦は地元のパン屋 3 軒から需要があり、以前 1 ヘクタール規模で生産した実績もあり、味も格別だと渡辺氏は語る。

また、母親がトラクターを操縦し、炎天下で汗を流す姿を目の当たりにした門倉氏の娘は、言葉で諭されたわけでもなく、自然と「自分も自動車の免許を取りたい」と意欲を示すようになった。

背中で語ることが、次世代育成への最も確実な継承であることを、この親子の姿が体現している。

三島の農家の現状については、夢を語る人がほぼゼロに近く、将来に対して、絶望的な話しか聞かれないと渡辺氏は嘆くが、農地を生産の場であると同時に、環境維持の場として捉え直すことで、未来への可能性を示したいと門倉氏は語った。

グラウンドワーク三島が描く未来：市民協働による「世界のベニス」計画

渡辺氏は、今年度、三島の街を「世界のベニス」のようにブラッシュアップする「街中改造計画（水辺の街・三島・街中改造計画）」という壮大なビジョンを掲げている。

これまでの活動の中で、市長・市議会議員・県会議員・国会議員が草刈りやゴミ拾いの現場に来たことは、一度もなく、行政への依存ではなく、活動に共感する市民一人ひとりの知恵と力を結集することで街を変えていくべきだという強い信念が、その根底にある。

グラウンドワーク三島には、すでに「AI ジャンボ」、渡辺氏の知識や考え方を反映した分身的な AI−が存在しており、門倉氏は、この活用と周知に力を入れていく意向を示した。

渡辺氏がいなくても、自分たちで活動を展開できる体制を整えることが門倉氏の目標の一つでもあり、組織としての持続可能性を高める取り組みとしても重要な課題として位置づけられている。